

デューイ教育哲学の形成と原理 (3)

——「新心理学」とヘーゲル主義——

小 柳 正 司*

(1988年10月15日 受理)

The Early Developments of John Dewey's Philosophy of Education and Its Underlying Principles (3)

—“The New Psychology” and the Hegelianism in His Early Michigan Years—

Masashi KOYANAGI

序

1882年9月にジョンズ・ホプキンス大学大学院哲学科に入学したデューイは、それ以後、ジョージ・S・モリスの影響のもとで、ヘーゲル主義へと急速に傾倒していった。だが、その一方で彼は、同じ哲学科のG・スタンレー・ホールを介して、当時めざましい発展をとげつつあった生理学的・実験的心理学に対しても強い興味を抱くようになっていた。その結果、彼は、ヘーゲル＝モリス流の観念論哲学を新しい科学的心理学と密接に関係づけるという野心的な課題に取り組むこととなった。既に筆者は、初期デューイにおけるヘーゲル哲学受容に関して一定の考察を試みたが¹⁾、本稿はこれを受けて、初期デューイにおけるヘーゲル主義のその後の展開を、主としてミシガン前期²⁾における彼の心理学関係の著作によりながら跡づけようとするものである。

ところでこの時代、1880年代は、アメリカの心理学史上、大きな「過渡期」の時代に当たっていた。それまで長い間、心理学は「精神科学」という名称のもとで哲学の一分野として扱われていた。それは、神学上の教義や倫理学上の第一原理の正当性を論証するために、実体としての魂(soul)の作用をもっぱら思弁的な方法で説明する一種の補助学問にすぎなかった。このような状況に根本的な変化が生じ、心理学が一個の独立した経験科学として成立しはじめるのが、まさに1880年代だったのである。これ以後心理学は、神学と哲学の束縛を脱して、新たに生理学や生物学と結びつくようになり、人間の精神作用は、神経系や感覚器官の働きに関する観察・実験・数量的測定等に基づいて客観的に説明されるようになった。ジェームズ・マーシュやノア・ポーターと

* 鹿児島大学教育学部教育学科

いった旧来のカレッジの哲学者たちは、依然として、心理学を神学への踏み石として教えていたけれども、既にこの時代、心理学は実験室での特別な訓練を受けた者でなければ担うことのできない独立の専門科学へと確実に変化しはじめていた³⁾。

以上のような心理学の新しい潮流の中で、当時のアメリカで最も先進的な役割を果たしていたのが、先に触れたG・スタンレー・ホールであった。彼は、1879年にアメリカ人としては最初に、ライプツヒのウイルヘルム・ヴントのもとで心理学実験のテクニックを学び、帰国後の1883年には、アメリカで最初と言われる心理学実験室⁴⁾をジョンズ・ホプキンス大学に開設したのであった。そして、1887年には英国圏で最初の心理学専門雑誌 *The American Journal of Psychology* を編集・発行し、さらに1892年にはアメリカ心理学会 (American Psychological Association) の初代会長となって、新しい科学的心理学の担い手たちの組織化に努力した⁵⁾。

デューイは、ジョンズ・ホプキンスの哲学科で、このホールから心理学を直接学ぶことによって、心理学の「過渡期」を文字通り身をもって経験することとなった。彼がカレッジの学生時代に学んだ心理学は、ノア・ポーターの『精神科学初歩』(Elements of Intellectual Science) やマーク・ホプキンスの『人間研究概説』(An Outline Study of Men) をテキストとする旧態依然たる思弁的心理学にすぎなかった⁶⁾。それは、人間知力 (human intellect) の分析を通じて、究極の「考える作用因」としての神の存在を論証する弁神論の一種に他ならなかった。これに対して、ジョンズ・ホプキンスのホールの心理学は、「神経なしには心は働かない」という命題を基礎とする新しい心理学の理想を鼓舞するものであり、それは「完全に実験的であって、大部分は、ヴントが『生理学的心理学』の最大・最新版で提示した素材を網羅していた。』⁷⁾

こうした中で、デューイは、ホールが開拓しつつあった新しい心理学を積極的に受け入れた。実際、彼は、ホールによる心理学の講義を全て受講した他、ホールが担当する「科学的教育学」のゼミナールにも参加し、またホールが開設した心理学実験室では「注意」(attention) に関する実験にも従事した⁸⁾。さらに彼は、心理学の学習を補うかのように、生物学のH・ニューウェル・マーチン教授による動物生理学の授業にも出席し、動物の解剖や顕微鏡標本の作製など、生理学実験の基本的な訓練をも受けた⁹⁾。

しかしながら、このような生理学的・実験的心理学に対する彼の興味にもかかわらず、デューイ自身の内在的な課題意識に照らしてみたとき、その興味はあくまで部分的で限定的なものであったと言わざるをえない。デューイにとって実験的心理学は、もとよりそれ自体として価値があったのではなく、哲学という製粉機に良質の穀物を提供するかぎりでは価値があったのであり¹⁰⁾、実験的心理学の諸成果は、あくまでも哲学理論の体系内においてそれぞれの意味を解釈されるべきものであった。確かにデューイは、ホールに代表される心理学の新しい潮流を積極的に受け入れはしたけれども、彼はそれを、ヘーゲル＝モリスの路線上に構築されつつあった自らの観念論哲学に何か実証的な裏付けを提供するものとして位置づけていたのである。

デューイのこのような態度は、既に、ジョンズ・ホプキンス入学直後に発表された「知識と感覚

の相対性」(Knowledge and Relativity of Feeling)と題する論文¹¹⁾において、その片鱗が示されていた。この論文の末尾で、彼はつぎのように述べていた。「われわれは、感覚の相対性の理論を心理学の理論として扱っているのではない。その理論の正しさは疑いない。その哲学的解釈が問題の要点なのである。……それは、思惟の構成力 (constitutive power of thought) が、それ自体究極的存在として、諸対象を決定づけていることを認める理論 [カント主義] とのみ合致しうるのである。」¹²⁾同様の態度は、その翌年に学内の形而上学クラブで発表された「意識の心理学」(The Psychology of Consciousness)と題する論文¹³⁾にも見られる。それは、精神 (mind) の無意識的活動が精神の意識的活動に及ぼす影響関係を論じたもので、無意識的活動は精神の「統覚作用」(apperception)と同一視され、意識的活動は統覚作用の中心たる「永遠の同一的自己意識」(permanent identical self-consciousness)が連続的な意識状態へと分化されたものと見なされて、「意識の心理学」は結果的に「超越論的哲学」[すなわち、カント=ヘーゲル哲学]の結論と同じ結果を導くと解釈された。

既に前稿で考察したように¹⁴⁾、デューイは第一論文以来、「事物は、それが精神の観念または現象となるまでは、精神にとって非存在である」¹⁵⁾とする命題を、自己の哲学の第一前提に据えていた。ここから彼は、カントの「思惟の構成力」の理論に基づいて、万有 (universe) の有機的統一を「究極的存在」(ultimate being)たる「自己意識」(self-consciousness)に求めるとともに、認識する主観と認識される対象、およびこれら両者の関係を「自己意識」そのものの運動として包括的に説明するヘーゲルの弁証法論理に「完成された哲学の方法」を見出した¹⁶⁾。

だが、デューイはさらに、この「自己意識」の運動を、単に抽象的概念の論理展開としてではなく、具体的な心理現象による生きた経験的事実として捉えていこうとする。それが、これ以後のデューイにおける《哲学の方法》としての《心理学》の構想であった。なぜなら、デューイにとって唯一可能な実在 (reality) は、全一的な経験として意識に現れるままの精神現象において他にはなく、従って「意識の経験」そのものを研究対象とする心理学こそが、実在に至る唯一の道と考えられたからである。それゆえ、デューイにとって心理学は、単なる経験科学としての心理学を意味するものではなかった。むしろ、彼にとって心理学は、第一義的には、意識経験全体を「自己意識」の展開過程として説明する一種の思弁的心理学を意味していたのであり、それによって哲学を方法論的に基礎づけるものであった。

1 新心理学

デューイは、ジョンズ・ホプキンスでの勉学を終える数ヶ月前、哲学科内の形而上学クラブで「新心理学」(The New Psychology)と題する論文を発表した。¹⁷⁾この中で彼は、生理学的心理学について、特に次のように述べている。

「生理学的心理学について最もありふれた見解によれば、生理学的心理学は、われわれの精神生活 (mental life) の一部または全ての現象が特定の神経構造によって物理的に条件づけられていることを示し、それによってこれらの現象を説明するところの科学だと思われる。しかし、これほど真理から遠ざかっているものはない。私の知るかぎり、第一級の研究者たちは全て、心的現象 (psychical events) の説明は、説明のために、それ自身心的でなければならず、生理学的であってはならないとはっきり認識している。」¹⁸⁾

デューイによれば、心的現象は、本来、神経系の生理学的な機能や構造には還元できない超物質的な現象なのである。生理学的心理学は、単に心的現象の物質的基礎を明らかにするにすぎず、それによって心的現象そのものまでも明らかにすることはできない。従って、彼によれば、生理学的心理学が心理学の発展に革命をもたらしたと言われる場合も、それは、生理学的心理学が「実験」(experiment) という新しい方法 (method) の導入によって、旧来の「内観」(inspection) の方法を補正し、心的現象の物質的基礎を解明する手段を飛躍的に拡大したことにあるのである。このように、生理学的心理学に対するデューイの態度は、きわめて限定的であった。¹⁹⁾

では、神経生理学的諸過程を超えた心的現象そのものはどのように説明されるのか。「新心理学は、目的論的要素 (teleological element) を強調し、……生命を、内在的な諸観念または諸目的が経験の展開を通して自らを実現 (realize) するところの有機体と見なす」²⁰⁾とデューイは言う。言い換えれば、心的現象は、神経生理学的諸過程によって物理的に条件づけられているのではなく、精神自体の自己実現の過程として目的論的に条件づけられているのである。ここでデューイは、全ての心的現象の背景に、それらを統一的に条件づけている本体 (noumenon) として「魂」(soul) の存在を仮定する。そして、それを静止した実体的魂ではなく、力動的に発展する生命と見なすことによって、個々の心的現象を、内在的な魂がその隠れた根源から徐々に自己を完成させていく一つ一つの段階として理解しようとする。

デューイのこのような心的現象の解釈は、明らかにモリスの心理学観を受け継いだものであった。モリスは、「経験的心理学」(empirical psychology) と「合理的心理学」(rational psychology) を明確に区別し、前者は単なる「現象の科学」(science of phenomena) であるのに対して、後者は魂を「実体 (entity), 多様に自己顕示する力 (a variously self-manifesting power), 自らを実現しようとする目的 (purpose)」として扱うものであって、絶対精神を扱う哲学の一部を構成するものとした。²¹⁾同様に、デューイの言う「新心理学」も、単なる経験科学としての心理学を意味するものではなく、第一義的には、心的現象全体を魂の自己実現の過程として目的論的に解釈する一種の思弁的心理学を意味していた。

だが、モリスとデューイの間には、微妙かつ決定的な差異が存在した。モリスは、ヘーゲルのいわゆる「汎論理主義」の立場を堅持して、哲学を絶対精神そのものの学と規定し、心理学を絶対精神の個人への顕現の学として哲学の下位学問に位置づけていた。これに対してデューイは、心理学

を同じく絶対精神の個人への顕現の学としながらも、だからこそ心理学は絶対精神を捉える唯一の方法（哲学の方法）だと考えた。言い換えれば、デューイは、有限な人間の意識に実際に生じることが多い精神現象を一步も越え出ないという立場を堅持して、ヘーゲルの汎論理主義を退けようとしたのである。「新心理学は、真理、実在が……魂の発展の生きた経験の中に与えられると信じる。」²²⁾デューイはそう宣言した上で、「新心理学」を次のように性格づける。

「経験は現実的であって、抽象的ではない。心的生活は、この経験の最も十全で、最も深く、最も豊かな顕現（manifestation）である。新心理学は、その論理をこの経験から得てくることで満足し、経験を特定のあらかじめ想定された抽象的諸観念にむりやり適合させることによって、経験の神聖さと統合性をだいなしにしたりはしない。新心理学は、生命過程の事実の論理を欲する。……そして、自ら経験におもむき、経験を生み出した母は経験を裏切らないと信じる。しかし、それは、この経験に命令を下そうとは思わない。……かくして、新心理学は、生命との接触のリアリスティックな刻印を帯びる。」²³⁾

ここで言われている「経験」とは、近代哲学一般で言うところの「意識の経験」のことであり、デューイ自身の言葉で言えば、「魂の生きた経験」のことである。そして、彼が「生命の論理」と呼んでいるものは、この「意識の経験」全体を一個の成長する体系として説明する論理、すなわち「成長と発達論理」のことである。それは、論理そのものとして見れば、彼が先に「カントと哲学の方法」（Kant and Philosophic Method）と題する論文で到達したヘーゲルの弁証法論理に他ならない。すなわち、それは、「理性が自らを〔主観と客観〕に分離し分化させ、諸々の差異へと進み、そうして、これらの差異をそれ自身の統一へと把握する」理性の自己発展（self-development of Reason）の論理である。だが、デューイはこの弁証法論理を「生命の論理」と言い換える。それは、彼が生物学的な生命の成長過程の中に、経験的事実によるヘーゲル弁証法の裏付けを見たからというだけでなく、むしろ経験的事実の方が論理そのものに先立つことを強調せんがためであった。そして、彼が「意識の経験」過程を一個の生命発現の過程として捉えようとしたのも、同様の意図からであった。それによって彼は、ヘーゲルの弁証法論理を純粋な論理のレベルから魂がたどる「具体的経験の論理」へと引き降ろし、あらゆる実在の根源たる理性の存在を「経験〔意識の経験〕の生きた具体的諸事実」に即して捉えようとしたのである。

かくして、デューイの言う「新心理学」は、経験的であるとともに目的論的でもあるという二重の性格を有することになる。それが経験的であるのは、有限な人間における「意識の経験」に徹底的に依拠するという意味においてである。だが、この「意識の経験」は、単なる物質現象の一連列ではなくて、内在的な魂の自己実現過程として目的論的に解釈されなければならない。これは、「逆立ちしたヘーゲル」に挑むデューイなりの方法であったと言えよう。勿論、今のところ彼はまだ、物質に対する精神の優位を説くという点で、徹底した観念論者であった。だが、とにかく、彼

のヘーゲル離脱は、ヘーゲルの弁証法論理を直輸入しながら、なおかつ、有限な人間意識が論理に先立つことを説くことから始まる。「新心理学」は、まさにその出発点に他ならなかった。

2 目的論的心理学

デューイは、1884年6月にジョンズ・ホプキンス大学大学院を卒業し、同年9月、ミシガン大学哲学科の専任講師となった。そこには、ジョンズ・ホプキンスで彼が教えを受けたモリスがいた。モリスは、ジョンズ・ホプキンスの訪問講師を勤めるかたわら、1881年からミシガン大学の哲学の教授となっていたが、デューイはこのモリスに直接招かれるという形でミシガン大学に赴任したのであった。ここで彼は、主として心理学関係の諸コースを担当した²⁴⁾。そして、これ以後、ミネソタ大学に転出するまでの数年間、彼の関心はもっぱら心理学の分野に向けられていく。それは、言うまでもなく、ヘーゲル流の「理性の自己展開」を「意識の経験」の具体的諸事実に即して捉えていく目的論的心理学の追求を意図するものであった。

ミシガン大学に着任して間もなく、デューイはモリスが主宰する哲学科内の研究会 (Philosophical Society) で「精神進化とその心理学への関係」(Mental Evolution and Its Relation to Psychology) と題する論文を発表した²⁵⁾。この論文で彼は、精神 (mind) は単なる諸部分の集合体ではなく、一個の有機的に統合された生命過程であること、そして精神は孤立した実体 (substance) ではなく、その環境である精神的宇宙との有機的関係において成長していくものであることを論じた。だが、それは、先に論文「新心理学」で示された「生命」の概念の心理学的意義を再度強調したにすぎないものであった²⁶⁾。

この時期のデューイの心理学研究を最も包括的な形で示したのは、彼の最初の著書である『心理学』(Psychology) であった²⁷⁾。もともとこの著書は、既存の心理学教科書に不満を抱いていた彼が、自分自身の教科書として執筆したものであったが、特にその序文と第一章は、この時期の彼の心理学観を知る上で重要である。既に彼は、1886年2月16日付のH. A. P. トリー宛の手紙の中で、執筆中の心理学教科書について触れ、「私は可能なかぎり最大限の原理的統一をもって教科書を書き、そうしてそれが心理学であることをやめることなく、哲学一般への導入となるように努めています」²⁸⁾と述べていた。同様のことを『心理学』の序文では次のように記している。

「われわれは、心理学を科学的でアップ・ツー・デートにし、形而上学から解放し、……しかも同時に、心理学を哲学への導入とするためにはどうしたらよいだろうか。……私は、厳密には心理学でないすべての素材を回避し、この分野における科学的専門家たちの研究成果を反映させるよう努力した。しかし私はまた、学生が彼の一層の勉学において出会うであろう〔哲学的〕諸問題に自然にかつ容易に導かれてゆき、それらの回答を見いだすための諸原理を示唆し、そして何よりも哲学的精神を発展させるようなやり方で素材を配列しようと努力した。私は〔哲学的〕諸

問題の提起とそれらの考察のための哲学的な方法があると確信する。その方法を初学者は他のどこよりも心理学において最も容易に見いだせるであろうし、見いだされた時には、すべての特殊な哲学的諸問題への最も可能性ある導入となるであろう。』²⁹⁾

以上から知られるように、デューイはある意味で、伝統と革新の橋渡しを企図していたと言うことができよう。旧来の心理学は、「論理学、倫理学、形而上学の合成物」³⁰⁾であるにすぎず、そのかぎりで心理学は哲学の下支えとして機能してきた。しかし、今や心理学は一個の科学となり、哲学から独立した地位を獲得しつつある。このような趨勢の中で、デューイは、一方で「心理学はそれ自体のために取り扱われる価値がある」³¹⁾ことを認めながら、他方では科学的心理学の諸成果を統一的に基礎づける哲学的原理の存在を予定し、それによって、改めて心理学を「哲学への優れた導入」として位置づけ直そうと試みる。その点で、彼は、心理学を哲学への踏み石と見なす伝統的観念に忠実であったと言えよう。それだけに、デューイのこの著書に対するG. スタンレー・ホールの書評は厳しかった。「諸事實は、それら自身で率直に語ることをけっして許されず、あるいは沈黙させられていて、常にそれらよりもはるかに重要な体系へと『読み込まれ』ている」とホールは指摘した。そして、「ヘーゲルの絶対的観念論が新旧とりまぜた〔心理学的〕諸事實へと『読み込まれる』ようにたいそう器用に調整されたということは、実際、地質学と動物学が創造の6日間へと巧妙に従わせられた時と同じくらい大きな驚きである」と皮肉った。³²⁾

しかしながら、デューイ自身の意図に即してみるならば、心理学——それも、形而上学から解放された経験科学としての心理学——を哲学への導入として位置づける試みは、哲学と心理学の関係把握における一つの転換を意味していた。なぜなら、心理学は哲学の単なる一分枝、あるいは哲学の応用分野といったものではありえず、むしろ心理学は哲学的諸問題の発生現場であり、哲学の妥当性を計る試金石となるものだったからである。

ホールは同じ書評の中で、「もしわれわれが、科学者の骨の折れる仕事を示す諸事実と諸結果を手にするべきであるならば、それらをはっきりと正確に述べてもらいたい」と要望した³³⁾。同様に、ウィリアム・ジェームズも、「むき出しの自我と個人の精神生活の具体的特殊物とを調停しようとするのは無駄なことだ。デューイがそうすることによってもたらしたことは、特殊物が扱われる番になったときに、それらから全ての鋭さと明確さを取り去ったことだけだ」と批判した³⁴⁾。しかし、そのような要望や批判は、少なくともデューイ本人には通用しなかったであろう。というのも、彼にとって重要なことは、個々の心理学的諸事実を細部にわたって精密に記述することよりも、それら諸事実が、なによりも心理学的事実である以上、意識経験の主体にとってどのような意味をもっているのかを問うことだったからである。

「心理学的諸事実を研究することにおいて、究極的な訴えは自己意識（self-consciousness）に向けられている。これらの事実はどれも、それらがこのように解釈されるまでは何ものも意味し

ない。……それゆえ、生理学的心理学において知られる諸現象は、もしそれらが意識の諸事実へと解釈されないならば、心理科学にとっていかなる価値ももたないことになるであろう。」³⁵⁾

デューイにとって心理学は、意識経験の主体たる「自我」(the self)の諸事実を扱う科学である。自我は、単に存在するだけでなく、自らの存在を意識することのできる唯一の存在であり、それは「自己意識」である。そして、自我は、自らの意識経験のうちに自らを多様に顕現し、何ものかを意識する自らの活動(意識経験)において自らを確認する。心理学は、この自我(自己意識)を、その多様な現象形態において、それらが生起する諸条件を呈示しながら研究するところの「意識の経験の学」であり、それらは、神経生理学的諸事実を含むあらゆる心理学的諸事実を、まさに意識の諸事実として、自我(自己意識)に向けて解釈する科学である。

そのような解釈のあり方を前面に問うて述べたのが、『心理学』と同年(1886年)に書かれた「魂と肉体」(Soul and Body)と題する論文である。この論文でも、デューイは「われわれは、諸事実から始め、それらを説明するためにどんな原理が求められるかを探求する。われわれは原理から始めない」³⁶⁾と宣言し、「生理学的心理学の諸事実はいかに解釈されるべきか」³⁷⁾を問う。そして、「純粋に生理学的領域を離れることなく到達できる結論」³⁸⁾として、神経系の活動の基本は「適応」(adjustment)であり、従って、それは「目的論のカテゴリー」に属すると述べる。すなわち、デューイによれば、神経活動は、刺激に対する単なる機械的反応ではなくて、刺激に対する選択的な反応であり、有機体の保全または発達のために特定の活動を選択し、他の活動を禁止する「目的適応」(purposive adaptation)である。このことをデューイはヴントを援用しながら論証するのであるが、彼はさらに、この神経活動の合目的性は、「心的(psychical)なものが物理的(physical)なもの〔肉体〕の中に内在していて、後者をそれ自身の目的と意図へと方向づけている」³⁹⁾ことを示していると結論づける。かくしてデューイは神経生理学的諸事実の説明原理として、物理的なもの〔肉体〕における心的なもの〔魂〕の目的論的内在(teleological immanence)を主張する。

だが、デューイはさらに、魂は単に肉体に内在するだけでなく、肉体を素材にして自らを表現し現実化(realize)すると主張する。その論拠を彼は、脳と神経系における「機能の局在化」(localization of functions)という心理=生理学的事実を求める。すなわち、彼は再びヴントを援用しながら、精神機能は個々の神経細胞に直接対応しているのではなく、神経細胞相互の間の結合と関係に依存していると述べ、このことは、魂が肉体に内在しながら、肉体をそれ自身の「器官」(organ)へと組織していることを示していると結論する。

「魂は肉体に内在し、その統合と目的を構成するばかりではない。魂は肉体に超越し、肉体の諸活動を変容させて、それ自身の心的目的へと向かわせる。魂は、肉体をそこからそれ自身の構造をうちたてる素材として、それによってそれ自身の生命を養う食物として使用する。これら二つ

の原理，すなわち，魂の内在と超越という原理に，われわれは諸事実の研究から導かれる。」⁴⁰⁾

かくして，生理学的心理学が提供する諸事実は，デューイにとっては，「物理的因果のカテゴリー」に属する物質現象ではなく，「目的論のカテゴリー」に属する精神現象であり，それらは，心的存在〔魂〕の介在によって合目的的に規制され，方向づけられた現象として解釈されなければならないのである。

3 《哲学の方法》としての《心理学》

『心理学』が出版された直後，デューイは，セントルイス・ヘーゲル主義運動の代表者で，かつてデューイが哲学の道を志すきっかけをつくったウィリアム・T・ハリスに宛てた手紙の中で，彼の『心理学』が意図するところを次のように記していた。

「私がドイツの哲学者たちを研究していた時，私は，彼らについてあなたが書いたものを読みましたが，その中の一文が常に頭に残っていました。……あなたは『カントからヘーゲルへの偉大な心理学的運動』について語っていました。……私が為そうとしたことのひとつは，その運動の少なくとも一部分をわれわれの現在の心理学言語に翻訳することです。」⁴¹⁾

ここでデューイが「カントからヘーゲルへの偉大な心理学的運動」と称しているものは，彼がこの時期一貫して追求していた問題，すなわち，学としての哲学はいかにして成り立つかという「哲学の方法」(philosophic method)の問題に対して最も有効な回答を与える，と彼が考えたものであった。

そもそもデューイにとって哲学とは，「それ自身が真理であり，かつ，他の全ての真理を判定することにも奉仕する原理」⁴²⁾を探求するものであり，それによって全ての個別諸科学を統一的に基礎づける《学》そのものを意味した。それはこの時期のデューイが，実証的諸科学の発展とそれらの専門分化の中で，かつての地位と権威を急速に失いつつあった哲学に対して，深い危機意識をもっていたことの反映でもあった。⁴³⁾そうした中で彼が哲学の最終的な拠り所として見いだしたものが，カント＝ヘーゲル哲学の「自己意識」の概念であった。それは，人間が宇宙の中の単なる存在でなく，自己を含めた全ての存在を意識することが可能な唯一の存在であり，そしてあらゆる諸科学は，結局のところ，この人間の「自己意識」の産物に他ならないこと，従って哲学は，人間の「意識の経験」(＝心理学的経験)を全体として包括的に説明することによって，諸科学の基礎づけを行うことが可能になるということを彼に教えた。

デューイは，以上のような方法意識の自覚にたつて，それを自ら「心理学的立場」(psychological standpoint)と称した。だが，それを「現在の心理学言語に翻訳する」というのは何を意味してい

たのだろうか。彼の『心理学』が、結局のところは、ホールが指摘したように、多数の心理学的諸事実をヘーゲル哲学体系の中へと器用に読み込む結果となったことについては、先に触れた。しかし、デューイ自身にとって、この翻訳作業は、ある意味で一つの「実験」を意味していた。つまり、「意識の経験」を包括的に説明する哲学理論の有効性を、現代心理学の諸事実にも照らして証明してみせる一つの試みを意味していた。

では、デューイの言う「哲学の方法」としての「心理学的立場」とは、一体いかなるものであったのか。彼は、イギリスの哲学専門雑誌『マインド』(Mind)の1886年1月号と4月号に、「心理学的立場」(Psychological Standpoint)と「哲学の方法としての心理学」(Psychology as Philosophic Method)と題する論文をあいついで発表した。彼は、この二つの論文によって、「カントと哲学の方法」以来追求してきた「哲学の方法」の探究を一応完成させた。その中で彼は、「存在するものは全て、意識または認識に対して存在する」⁴⁴⁾という彼の初期からの一貫した立場を再確認した上で、「心理学的立場」を次のように規定した。

「われわれは、実在 (reality) の本性、あるいは哲学的探究のいかなる対象の本性も、それをそれ自体で存在するものとしてではなく、われわれの認識 (Knowledge)、つまりわれわれの〔意識〕経験における一要素として、それがわれわれの精神に関係づけられ、一つの『観念』となるものとしてのみ、検討することによって決定する。」⁴⁵⁾

言い換えれば、「意識は全ての実在の唯一の内容、説明、基準」であり、従って「意識の科学」である心理学は「実在の究極の科学」であり「哲学の方法」である、ということになる。⁴⁶⁾

だが、このような「心理学的立場」は、一種の主観的観念論ではないのだろうか。全ての実在は、結局のところ、個人の意識現象にすぎないということにならないだろうか。これに対してデューイは、そのような批判は、何が個人の主観的意識であり、何がそれを越えた客観的对象であるのかを最初に仮定している「論点相違の虚偽」(ignoratio elenchi)だと反駁する。言い換えれば、何が主観で何が客観であるのかは、それら自体、意識において、意識を通して決定されなければならないのである。その意味で、「心理学的立場」は、「普遍的立場」であるとデューイは言う。

「われわれは、あらゆる主観的なものと客観的なもの、個別的なものと普遍的なものの本性を、それが意識経験の内に見いだされるままに決定すべきである。意識経験は、第一次的局面においては、私の個別的自我が『移行行き』(transition)であり、『生成』(becoming)の過程であることを示す。しかし、それはまた、この個別的自我がその移行行きを意識しており、それが生成してきたところの過程を知っているということも示す。つまり、個別的自我は普遍的自我をその立場として受け取ることができるのであり、従ってそれ自身の起源を知ることができるのである。そうすることにおいて、個別的自我は、普遍的自我に向かう過程の中に自らの起源があるこ

と、従って普遍的自我はけっして生成したものではないことを知る。……意識は、それ自身の内部に生成の過程を含むということ、そしてこの過程は、それ自身を意識するようになるということを示してきた。この過程は、個別的意識である。しかし、それは自らを意識するがゆえに、普遍的意識を意識する。……個別的意識は、自らを通しての普遍的意識の現実化の過程にほかならない。過程として、現実化として見ると、それは個別的意識である。生み出されたもの、あるいは現実化されたものとして、過程を意識するものとして、すなわちそれ自身を意識するものとして見ると、それは普遍的意識である。』⁴⁷⁾

ここでデューイが「普遍的意識」と言っているものは、意識がいわば自らを対象化して捉えるときの意識の自己関係的な働きのことである。あらゆる実在が意識に対して関係的であり、それらの本性が意識の検討を通して決定されるものだとすれば、そこには、必然的に、意識の経験過程自体を意識する「普遍的意識」（デューイはこれを「絶対的自己意識」とも呼ぶ）の存在が仮定されなければならない。そして、デューイは、この「普遍的意識」の働きそのものが「心理学」を構成すると見なすのである。

「心理学的立場からすれば、主観と客観の関係は意識内の関係である。そして、その関係の本性または意味は、意識自体の検討によって決定されなければならない。心理学者の職務は、意識に対してその関係がどのように生ずるかを示すことである。彼は、いかにして意識が自らを分化させて、それ自身の内に、すなわちそれ自身に対して、主観と客観を存在させるようになるのかを指摘しなければならない。』⁴⁸⁾

そして、心理学者（＝普遍的意識）は、「意識内の様々な諸要素の発生的説明を与えることによって、それらの位置を確定し、それらの妥当性を決定し」、最終的には「意識自体の本性」を明らかにする。⁴⁹⁾言い換えれば、意識の生成過程（個別的意識）についての意識として生じた普遍的意識は、意識の生成過程を全体として包括的に説明することによって、自らを実現する、つまり意識そのものの本性を示すのである。

以上のように理解された心理学をもって、デューイは、「完成された哲学の方法」⁵⁰⁾と宣言する。彼にとって、哲学とは、特殊諸科学を全体として統一的に基礎づける《学》そのものであり、実在を部分部分として扱うのではなく、実在の全体性を扱う「全体の科学」である⁵¹⁾。このような哲学の成立根拠を、デューイは、カント以後のドイツ観念論哲学の主張に依拠して、「絶対的自己意識」（＝普遍的自己意識）の概念に求めた。なぜなら、人間は、一面においては、有限な諸事実の中の一つの有限な事物にすぎないが、他面では、「自己意識的なものとして、彼の中に全ての存在と認識の統一を顕現し、彼の自己意識の本性のゆえに無限であり、全ての対象と出来事の紐帯、生きた統一である」ということをドイツ観念論は示していたからである⁵²⁾。

しかしながら、デューイによれば、ドイツ哲学は人間のこの二重の性格に基づいて、哲学は絶対的的自己意識をそれ自体として扱うのに対して、心理学は絶対的的自己意識を、それが有限な人間の中でどのように機能するのかに関してのみ扱う、というように区別した。これに対して、デューイは、絶対的的自己意識を、その人間における顕現から区別して扱うことはできないと主張する。なぜなら、絶対的的自己意識は、それが人間の中に部分的にでも顕現することを通してしか哲学の対象とはなりえないからである。かくして、デューイは、哲学と心理学の関係を次のように規定する。

「絶対的な自己意識がある。この学が哲学である。この絶対的な自己意識は、それ自身を人間の認識と行動の中に顕現する。この顕現の学、現象学が心理学である。」⁵³⁾

絶対的的自己意識は、個人の中に現実化される以外、存在をもたない。そして、心理学はこの現実化を個人の具体的な意識経験の過程に即して捉える科学である。それゆえ、「心理学は哲学の完成された方法」⁵⁴⁾である。絶対的的自己意識がそれ自体で完結したものと見なされてきたのは、これまでの哲学がそれを一個の論理上の要請として措定してきたからに他ならない。「心理学的立場」は、絶対的的自己意識を具体的事実において捉え、哲学を事実の上に基礎づける。かくして、デューイは、ヘーゲルに対する自らの独立宣言として次のように述べる。

「もしわれわれが、経験を個人の中に現実化されるかぎり、その絶対的全体性において考察するならば、『全体の意義』は、全体として自ら検証するものを越えて決定されることができようか。そして、この全体とこれらの結合環は心理科学によってわれわれに与えられるがゆえに、これは完成された哲学的方法以外の何であろうか。そして、哲学はこの全体性から抽象し、それをその物質的側面に関しては自然哲学と見なし、その形式的側面に関しては真の論理学と見なす以外にどんなことをしなければならないであろうか。心理学は、個人を通しての宇宙の現実化の科学として、かの全体を与えることによって、全体の意義についての問題に答え、そして同時にこの全体内での諸部分の位置を示すことによって、諸部分およびそれらの連関 (connection) についての意味を与える。」⁵⁵⁾

註

- 1) 拙稿「デューイ教育哲学の形成と原理(2)——ヘーゲル哲学の受容をめぐる——」、『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第33巻, 1987年3月, 所収。
- 2) ここで「ミシガン前期」とは、デューイがミシガン大学に哲学講師として赴任した1884年から、彼がミネソタ大学に転出する1888年までを指す。ちなみに、「ミシガン後期」とは、彼がミシガン大学に復帰した1889年から、シカゴ大学に転出する1894年までを指す。
- 3) A. A. ロバック『アメリカ心理学史』, 法政大学出版局, 1956, pp.137-138, 177-187, 及び, D. シュルツ『現代心理学の歴史』, 培風館, 1986, p. 3, 参照。

- 4) 一部には、アメリカ最初の実験室は、1875年にウィリアム・ジェームズによって、ハーバード大学に開設されたという説もある。ローバック同上書、pp.188-189、及び、シュルツ、同上書、pp.141-42、参照。
- 5) ローバック、同上書、pp.184-185、及び、シュルツ、同上書、pp.149-155、参照。尚、ホルのジョンズ・ホプキンス在職は、1882年から1888年である。
- 6) Robert L. McCaul, "Dewey's School Days," *The School Review*, Winter 1962, pp.443-449.
- 7) G. E. Partridge, ed., *Genetic Philosophy of Education: An Epitome of the Published Educational Writings of President G. Stanley Hall of Clark University*, 1912, p.14; G. Stanley Hall, *Life and Confession of a Psychologist*, 1923, p.232.
- 8) George Dykhuizen, *The Life and Mind of John Dewey*, 1973, p.31. デューイがホルの実験室で行った「注意」に関する実験について、彼自身がある書簡の中で次のように説明している。「一つは、できるならば、ある一つのことにきわめて強く注意を固定することが意識における残余にどのような効果を及ぼすかを決定することであり、そして他の一つは、不随意筋運動を生み出す際に注意がもつ効果——『精神』の判読様式に従って生ずる或るもの——を決定することです。」(Dewey to Torry, 4 February 1883, cited in Dykhuizen, op. cit., p.31.)
 なお、上記の手紙の日付からみて、デューイはホルの心理学実験室〔ということは、アメリカ最初の心理学実験室〕に学んだ最初の学生の一人ということになる。同期生には、ジョセフ・ジャストローとJ. マッキン・キャッテルといった、後にアメリカの代表的心理学者となった者がいた。
 (Jane M. Dewey, "Biography of John Dewey," Paul Arthur Schilp ed., *The Philosophy of John Dewey*, 1939, p.16.)
 後年デューイは、ミシガン大学哲学科主任教授となった時、学生に対する哲学教育の一環として、心理学実験室の必要性を訴え、実現させていることは興味深い。Willinda Savage, "The Evolution of John Dewey's Philosophy of Experimentalism as Developed at the University of Michigan," Unpublished Ed. D. dissertation, University of Michigan, 1950, pp.51, 53, 64, 参照。
- 9) Frances L. Davenport, "The Education of John Dewey," Unpublished Ed. D. thesis, University of California, Los Angeles, 1946, p.66.
- 10) デューイは、ホルの心理学の授業を初めて受講したとき、次のような感想を述べている。「私は、それと哲学の間のきわめて密接な関係はわかりませんが、他にないものとしても、製粉機に穀物を供給するものにはなるだろうと思っています。」(Dewey to Torry, 4 February 1883, cited in Dykhuizen, op. cit., p.37.)
- 11) この論文は、最初、1882年12月12日に哲学科内の形而上クラブで発表され、その後、『思弁哲学雑誌』(Journal of Speculative Philosophy)の1883年1月号に掲載された。なお、この論文については、前掲拙稿、pp.19-20、において検討を加えた。
- 12) Dewey, "Knowledge and Relativity of Feeling," *Early Works of John Dewey*, vol.1 (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1969) p.37. (傍点筆者)
- 13) この論文は、1883年11月13日に形而上学クラブで発表されたが、公刊されなかった。その内容については、11月17日づけでデューイがトリーに宛た手紙から知られるだけである。これについては、Dykhuizen, op. cit., p.36, 参照。
- 14) 前掲拙稿、p.18.
- 15) Dewey, "Metaphysical Assumption of Materialism," *Early Works*, vol.1, p.5.
- 16) Dewey, "Kant and Philosophic Method," *Early Works*, vol.1, pp.43-47. なお、前掲拙稿、pp.19-20、参照。
- 17) この論文は、1884年3月11日に発表され、後に、『アンドーヴァー・レビュー』(Andover Review)の1884年9月号に掲載された。
- 18) Dewey, "The New Psychology," *Early Works*, vol.1, p.52.
- 19) Ibid., pp.52-53.
- 20) Ibid., p.60.
- 21) Morton G. White, *The Origins of Dewey's Instrumentalism*, (New York: Octagon Books, 1964),

- p.16.
- 22) Dewey, "The New Psychology," p.59.
 - 23) Ibid., pp.59-60.
 - 24) Dykhuizen, op. cit., p.46. なお, ミシガン大学在職中の各学期ごとのデューイの担当科目については, op. cit., pp.46-51, に詳しい。
 - 25) この論文は公刊されなかった。1884年9月15日付の地元新聞, *The Ann Arbor Courier* に, 講話があったことを報ずる記事が載ったことからみて, 発表は1884年9月14日に行われたものと思われる。
 - 26) 論文の内容については, 学内の学生新聞, *Michigan Argonaut* に要約が掲載された。Savage, op. cit., pp.123-124, 及び, Neil Coughlan, *Young John Dewey* (Chicago: University of Chicago Press, 1973) p.56, にその全文が引用されている。
 - 27) Dewey, *Psychology* (1887), *Early Works*, vol.2, (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1967) 本書の発行年は, 1887年とされているが, 実際に発行されたのは, 1886年11月だったようである。本書の出版の事情については, *Early Works*, vol.2, "A Note on the Text," by Jo Ann Boydston, 参照。
 - 28) Dewey to Torrey, 16 February 1886, cited in Dykhuizen, op. cit., p.46.
 - 29) Dewey, *Psychology*, *Early Works*, vol.2, p.4.
 - 30) Ibid., p.3.
 - 31) Ibid., p.3.
 - 32) G. Stanley Hall, "Review of Dewey's Psychology," *American Journal of Psychology*, November 1887, pp.157,156.
 - 33) Ibid., p.158.
 - 34) James to Robertson, 1886, cited in Dykhuizen, op. cit., p.55.
 - 35) Dewey, *Psychology*, p.16. (傍点筆者)
 - 36) Ibid., p.105. (傍点筆者)
 - 37) Ibid., p.94. (傍点筆者)
 - 38) Ibid., p.104.
 - 39) Ibid., p.100.
 - 40) Ibid., p.107.
 - 41) Lewis S. Feuer, "John Dewey and the Back to the People Movement in American Thought," *Journal of the History of Ideas*, vol.20. 1959, p.545. 鶴見和子訳「J. デューイとアメリカにおけるヴ・ナロード運動(上)」『思想』1961年2月号, p.83.
 - 42) Dewey, "Kant and Philosophic Method," *Early Works*, vol.1, p.34.
 - 43) 拙稿「デューイ教育哲学の形成と原理(1)——信仰と学問をめぐる——」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第32巻, 1986年3月, pp.28-29.
 - 44) Dewey, "Psychological Standpoint," *Early Works*, vol.1, p.130.
 - 45) Ibid., p.123.
 - 46) Ibid., p.144.
 - 47) Ibid., p.142.
 - 48) Ibid., p.131.
 - 49) Ibid., pp.130-31.
 - 50) Dewey, "Psychology as Philosophic Method," *Early Works*, vol.1, p.159.
 - 51) Ibid., p.158.
 - 52) Ibid., pp.145-46.
 - 53) Ibid., p.156.
 - 54) Ibid., p.157.
 - 55) Ibid., p.148. (傍点筆者)